



TITLE:

<批評・紹介> 今西錦司編「大興安嶺探検 一九四二年探検隊報告」

AUTHOR(S):

藤枝, 晃

CITATION:

藤枝, 晃. <批評・紹介> 今西錦司編「大興安嶺探検 一九四二年探検隊報告」. 東洋史研究 1952, 12(2): 177-179

ISSUE DATE:

1952-12-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138959>

RIGHT:

批評・紹介

大興 安 嶺 探 検

一九四二年探検隊報告

今 西 錦 司 編

昭和二十七年七月 毎日新聞社

A5判本文五三四頁 圖版一六頁 序一四頁

索引一八頁 地圖一葉 一、〇〇〇円

これは一九四二年五月七月に行なわれた今西錦司氏一行の北部大興安嶺探検隊の正式報告書である。

この探検隊は、京都探検地理學會によつて組織され、當時京大理學部の講師であつた今西氏を隊長とし、大學院學生森下正明氏が副隊長、學生十人が主力であつた。隊は滿洲の西北國境に近い北部大興安嶺を、解氷期の五月に、南の三河から（本隊）と、北の漠河から（補給隊）と、二隊に分れて相向つて出發し、途中別の支隊が分れて、地圖上の白色地帯の踏査を行い、一、〇〇〇料、緯度にして三度の距離を踏破して、途中の豫定地點で出會うことにみごとに成功したものである。報告書は組版中に戦災で焼かれた由で、その後いろいろな制約があつて、十年目にこの正式報告書が明るみに出た。こうして世に出た、この報告書は、いろいろな問題を孕んでいる。第一に探検そのものについて、第二に報告書の形式について、第三に探検の成果について。

第一の探検そのものについて、何よりも先に問題となるのは、探検隊員の構成である。隊長・副隊長以外は、全部、京大・大阪商

大・京高蠶などの現役の學生ばかりであつて、これに現地参加の技術員・醫師など七人が加わる。ところで、この十人の學生のうち五人は京都一中の出身者である。それより七年前の一九三四―五年の冬に京大白頭山遠征が行なわれ、その中に四人の同校の卒業生が居り、一人は外ならぬ今西氏であつた。卒業生たちは母校の全生徒の前で報告の講演・映畫の會を開いたが、その時、並居る一、〇〇〇人の少年の中で、右の五人は胸をおどらせていたのだという。かれらは、この感銘からこの道にとびこんで、中學・高校・大學にかけて數年間、この隊長とその周圍の者から、アルピニズムと探検との訓練をうけて來た者たちである。のこりの五人も、中學は違つても、やはり數年の訓練を経た、いわば「子飼ひ」の連中ばかりである。探検というものは、肉体的には困難を極め、同時に専門學術についての豊富な識見とを必要とし、「若さと經驗」という、相反する二つの條件を要求する。極めて早い時期に探検家としての訓練をうけはじめたこれら青年たちは、この時にはすでにアルピニズムについて相當に豊富な経験を積んでおり、また専門分野の學問についても、同時になかなかの觀察力をもつまで訓練されていた。こういう中核があつたればこそ、現地参加の技術員や傭人を加えても、長期間の困難な旅行を破綻なしにつゞけ得たのである。長期訓練の必要というものは、外國の大探検隊についても常に認められていた所で、専門家の顔を揃えさえすれば、探検や調査は立ち所に出發できるものと考へる人に重要な教訓を與えている。

これに關連して、次に問題となることは、アルピニズムと探検とのかね合いということである。本隊は踏査の途中で、わき道へそれて無名の一處女峰の征服を行なつて、隊員はそれに非常なよろこび

を感じている。そのことを別にしても、この探検には極めてアルビニズムの氣分が濃厚である。探検は學術的作業であり、アルビニズムはスポーツである。そのちがいははつきりしている。だが、苦しい探検に耐える身心をきたえるために、アルビニズムは大變有効な手段である。そういう經歷をもつ隊員たちで行なわれた探検であるため、この探検にはアルビニズムの氣分が多分にこつている。そして、このことは、かれらだけの問題でなく、かれらとその周囲の動きに關連がある。

「京都派」と呼ばれるアルビニストたちの一派は、これより前からたゞの登山からだんだん學術探検に移行する傾向をもつていた。この大學でも「山岳部」「登山部」と名のる學生のクラブは、京大では「旅行部」と號して、たゞの登山以外のものを目ざすことをあらわしていた。そのO・BたちはA・A・C・K（アカデミック・アルパイン・クラブ・オヴ・キョート）を作つて、さきの白頭山遠征や、内蒙古旅行などを試みる様になつていた。これを更におし進めたのが、一九三九年の京都探検地理學會の組織であり、そして、この北興安嶺探検は、この學會の名のもとに行なわれた。ボナベに次ぐ第二回の北大遠征であつた。その翌々年に、學會の主要メンバーが張家口の西北研究所へ引移つて、一九四四―四五年冬の六ヶ月に及ぶ内蒙古縱斷旅行を行なつたが、これになるとアルビニズムの氣分は極めて稀薄になる。北興安嶺は、そこに至る一步前のものであつたのである。

探検のルートは、さきに言つた様に、本隊が三河を出發して漠河に向つて北上する。その間は緯度にして三度、滿洲國の西北角で、「山には密林がしげり、谷には大きな川が蛇行して」「自然が今なほ

人間を支配している世界」（『探検』創刊號）であり、住民といへば僅かばかりの狩獵オロチョンしか居らず、その時までに發行されている地圖は、全く頼りにならないものであつた。この本隊への補給のために、別の一隊が漠河から南下するという方法をとり、兩隊は出發の準備中に思いがけなく手に入れることができたという航空寫眞地圖を頼りに、天測によつて行進しながら、互に無電で連絡をとり、さらに飛行機からの補給もうけるといふ、當時としては、まことにめざましい方法をもちいた。その一面、輸送機關としては、粗食に馴れた駄馬と、オロチョンの飼う馴鹿とを用いた。裝備を軽くするために、食料は乾燥野菜のほかは、現地で釣つた魚と射つた鹿の肉とを用いる。すべてが、かれらの經驗と研究にもとづく、文明と自然との驚嘆すべき混淆調である。

報告書の体裁は、紀行文の中に學術的觀察をできるだけ織りこみ、どうしてもはいりきらぬ部分だけ、別に卷末に『學術報告』として六篇を添える。どの探検の報告書でも、紀行と學術論文乃至圖録との組合せは厄介な問題となる。と同時に報告書を利用する側にとつても、時々まごつかねばならぬ場合の起る問題でもある。専門の大家を集めた様な場合なら、どうしても一人一人の専門の論文を集めた形になつて來るが、専門に固まつていない若い人たちのこの報告書は、この様な綜合的な形をとることができた。

卷末の『學術報告』六篇。吉良龍夫氏の乾濕並に溫量指數についての理論は、次の内蒙古草原の旅行で更に確かめられ、草原類型の分類の基準として利用された理論である。川喜田二郎氏の農業北限線の問題は興安嶺がシベリア圈の東端にあたるという性格をとらえて、遠くシベリア全体を見とおした議論である。藤田和夫の報告は

前人未踏査の地域の調査から出發しての、地質形成論である。それに學界に寄與するところのある論文である。

これらの論文は、おおむね、隊員たちの卒業論文となつたものである。さきに私は、かれらが「専門の分野の學問でもなかなかの觀察力」をそなえるに至つていたと申したが、これだけの論文は、卒業論文としては格段に高い水準のものといわねばならない。しかもかれらは、こんどは、それを出發點にして學界にはいり、現にその學問をすゝめてゐる。かれらは、登山ばかりでなく、學者としての早期訓練も同時にうけていたのである。見方をかえれば、探檢は學者養成の一つの良い途である、ともいえるかも知れない。また、探檢の側からいえば、「若さと經驗」の問題を、この様に、早期養成ということ、ある程度、解決したもので、これは將來の探檢についての偉大な教訓である。

いま、「ある程度」と申したのは、やはり、すべてがすべてうまく行つたのではなく、至らない點も勿論あるからである。例えば、この探檢のもつとも目立つた人文科學的な面であるオロチョン族に關する部分など、民族調査として満足すべき程度のものでない。このことは、早期養成の失敗を示すものではないけれども、早期養成をうけた者だけでは探檢隊は組織できないか、という問題を提出するものである。

(藤 枝 晃)